古筆切拾塵抄・続（八）

――入札目録の写真から――

小島孝之

はじめに

前回は、急遽「宮本切」という古今集の断簡についての寄り道？をしてしまったが、今回はまた、いつもの入札目録の内容の紹介に戻りたい。

昭和三年に行われた入札会では、Ａ４判の大型本でかつ分厚い目録がいくつも制作されている。たとえば、四月の紀州徳川家、五月の島津侯爵家などの旧大大名家、九月の江州浅見家などの豪商等、いずれも内容の充実したさすがと思わせる内容の豪華な目録が作られている。そうした中の一冊で、昭和三年十月十一日に入、開札が行われた『神戸川崎男爵家蔵品入札目録』を取り上げたい。

現在の川崎重工の基となった川崎造船所の生みの親である川崎正蔵の蒐集品である。これは、前年の金融恐慌で川崎家が危機に陥り、故正蔵の蒐集品の大部分を売却することになった、その時に作られた目録である。余談であるが、戦前の入札目録を見ていると、近代日本の経済動向を裏側から見るおもむきがあり、なかなか興味深いものがある。

さて、川崎正蔵は、美術品蒐集を始めたきっかけが、日本の伝統的古美術品の名品が次々に外国人に買われて国外に持ち去られることに危機感を抱き、国内に止めるということだったので、神戸布引の自邸内に長春閣と名付けた美術館を建て、そこで自分の蒐集品を一般に公開したのであった。私利私欲に走らない、筋の通った経済人であったと言えよう。その優れた蒐集品が分散してしまったのも、時代の流れでやむ

をえないものがあろう。財界人の大コレクションというと、比較的新しい例（といってもすでに何十年かを経た昭和時代のことだが）として、松永安左衛門（耳庵）のコレクションは多くの部分が、現在は福岡市立美術館に収蔵されているし、安宅産業の創業家安宅英一による東洋陶磁器の大コレクションは会社の倒産の中で散逸を免れ、今大阪市立東洋陶磁美術館に収蔵されている。それらは散逸したら二度とまとまることもないであろう秀逸のコレクションであるが、美術品ほど世の中の経済動向に翻弄されるものも他にあるまい。最終的に公立の美術館、博物館に収まることで、ようやく安住の地を得るのであろうか。松永のコレクションも、松永美術館が解散に追い込まれた末に、福岡市に買い取られて落ち着いたのであった。やはり、最後は国民の税金で維持・管理するしかないのであろう。私は、美術品にはそれだけの価値があると言っても過言ではないと思っている。

閑話休題、川崎男爵家の入札に話を戻す。この目録には、これまで取り上げた多くの目録がそうであったように日本画・中国画が中心ではあるが、古筆切の掛軸が一切含まれないという点に著しい特徴がある。ならば、本連載に取り上げる謂れはないということになるのだが、わずかに一点、古筆手鑑が含まれていて、そのすべてが現在所在不明なのである。ということは、運が良ければ手鑑は解体を免れて、まるごとどこかに完存しているか、不幸にも先の大戦で焼失したか、そのいずれかと想像される。どちらかと言えば後者の蓋然性が高そうに思われるのはいささか残念。中に、極めて興味深い古筆切が収められているので話題提供として意味があろう、というのが今回取り上げる理由である。饒舌な前置きになったが、さっそく順に見ていくことにしよう。

まずは、目録じたいの概要から。昭和三年十月八日・九日の両日が下見で、下見の会場は神戸市布引の川崎家本邸。入札・開札は十月十一日、大阪美術倶楽部で行われた。紹介者の古美術商は、大阪の池戸宗三郎を筆頭に、晴海商店、戸田弥七、山中吉郎兵衛等、京都の今井貞治郎、林新助、土橋永昌堂等、東京の伊藤平山堂、川部商会、中村好古堂、山澄商店等、さすがに三都の有名どころの古美術商が参加している。前述のようにＡ４判の大型で、厚さ３センチ（頁数は記載がないので数えていない）、モノクロのグラビア刷りで、二つ折り、三つ折りのページを多数含む。出品番号は、三六二点に及ぶ。因みに巻頭一番は、東山御物の牧谿の達磨図の掛軸である。

さて、その一三二番に「古筆手鑑」と題して、見開き三面、計十六点の古筆切が見える。以下、一点ずつ見ていくことにしよう（頭から順に番号を振って極札を見出しとする）。

一　川崎男爵家旧蔵「古筆手鑑」

一「大織冠鎌足公圖無量（守村印）」

大型の経切二行である。天地には雲母か箔が散らされており、文字は金泥かと思われるが、とにかくまったく見えないのではいたしかたない。内容不明である。

二「天神即説呪曰（守村印）」

内容は『金光明最勝王経疏』巻四「浄地陀羅尼品第六」の二行である。伝道真筆の『金光明最勝王経』というと、紫の染紙に金泥で経文を書写した「河内切」が有名である。しかし、本品はモノクロ写真のため、地色が紫なのか紺なのか分からない。文字は金泥だと思われるが、内容が疏である点からも、河内切のツレとは認められない。（図1）

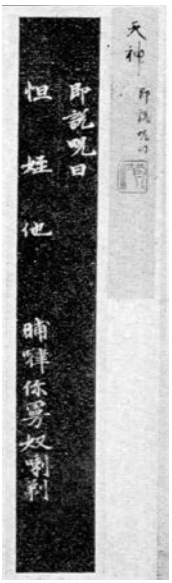


図1　菅原道真・経切

即説呪曰

怛　姪　他　　晡律你曼奴喇剃

三「傳教大師空界清浄（守村印）」

『大般若波羅蜜多経』第二六二巻「初分難信解品第三十四之八十一」の三行。伝教大師の経切といえば、「焼切」または「焼経切」と呼ばれる、上下の紙端を焼損したものが有名。織田信長による比叡山の焼き討ちで焼損したからだというが、経典の種類もさまざま、筆跡もさまざまで、ツレというには余りにも多種多様である。国宝手鑑『藻塩草』（京都国立博物館蔵）に貼られている「焼切」は『大般若経』の断簡であり、その他の「焼切」も多くが『大般若経』であるのは事実であるが、ツレと推定できるものはごく少数に止まる。本断簡についても、ツレを確認するのは難しい。現在の時点でツ

レと思しき断片は、弥彦神社所蔵の「菊家文書」という古筆帖に貼られている『大般若経』の三行しか目にしていない。（図2）

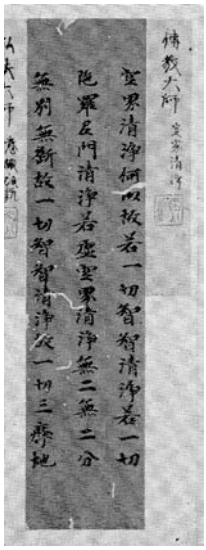


図2　最澄・経切

空界清浄何以故若一切智智清浄若一切
陀羅尼門清浄若虚空界清浄無二無二分
無別無断故一切智智清浄以一切三摩地

四「弘法大師意趣故説（守村印）」

仏書の断簡二行。内容は『華厳五教章指事』で、ツレと思われる断簡は今のところ他に5葉を確認している。公開されているものとしては、善光寺大勧進所蔵の古筆貼交屏風（写真複製もあるらしいが、実際に撮影させていただいた写真による）、及び村上翠亭・高城弘一両氏監修の『古筆鑑定必携古筆切と極札』[注1]の口絵にカラーで掲載されている個人蔵の『御手鑑』にちょうどそのツレの写真がある。他には、貫前神社所蔵古筆手鑑（同神社の宝物館に展示されている。直接撮影させていただいた写真による。以下同じ）に貼付のもの、古書店の販売目録に載っているものなどである。いずれも、上巻の「指事末」のかなり接近した部分に集中している。本断簡は、大正大蔵経の二一六頁b（中段）18行～22行目に相当する箇所である。（図3）

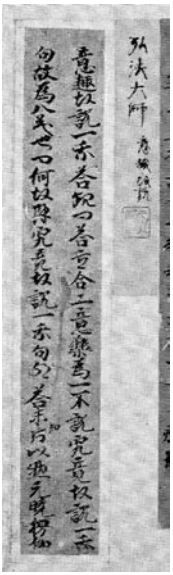


図3　空海・仏書切

意趣故説一乗答観問答意合二意楽為一不説究境故説一乗
句故為八義也問何故除究竟故説一乗句耶答未所以然元暁
楞伽

二行目の「知」は書き落としたらしく、右傍に小さく付記している。

五「弘法大師田不知（守村印）」

内容不明の仏書切五行である。伝弘法大師筆の仏書切で最も有名かつ書名の分かっているものに、「東寺切」と呼ばれる『判比量論』の断簡がある。新羅の学僧元暁が著した唯識の論書であるが、その大部分は散逸してしまい、わずかに「東寺切」の名で十点程度が知られるのみである。もちろん弘法大師空海の筆跡とは何の関係もない。本断簡はその「東寺切」に類する仏書の断簡で、ツレかと思われる断簡が数点現存する。草書体の文字が連綿せず、一字ずつパラパラと書きつけられる。弘法大師筆と称する「鼠跡心経」と類似した書法である。お世辞にも上手い字とは思えないが、これが何故弘法大師筆と称されるのであろうか。自分なりにその源流を考えてみたが、こうした書風の優れた作品として、孫過庭の『書譜』（六八七年）や懐素の『草書千字文』（七九九年）に行き着いた。孫過庭は王羲之の筆意をよく得たものとして尊ばれたということだから、そのためにこうした書法で書かれたものを、弘法大師に宛てたのではないかと想像する。乱暴な意見だが、書道の素人の感想に過ぎないので、戯言の類とお許しを乞う。

さて本断簡に戻ると、これはどうやら『智恵訪文』と称されているもののツレであるらしい。『智恵訪文』という書物がいかなるものであるかまったく分からないのだが、これについて書いたものとしては、今あらゆる解説の基になっているのが、田中塊堂による『古写経綜鑑』[注2]の説明である。その説明を引用すると、「智恵訪文とは秦山閑沽記曰『青草論恐草書形誤歟』と、智恵は梵語般若を譯して智恵といふ訪は謀也汎問謀也又議也とある。」とあって、どうにも理解できない意味不明の悪文。諸氏引用しつつ困惑の態を隠せない。同書には5行の写真が載せられているが、見出しによると、住友保丸氏の所蔵にかかる一巻十二枚に二十八行が書かれているとのこと。一枚当たり四行になり、これもいささか理解し難い。あるいは、一枚あたり二十八行ずつ書かれたものが十二枚つながった巻物であるということか。「智恵訪文巻三」とされているから、そこに書名が付されていたのだろう。巻頭か巻末が含まれていたか。その部分は図版にないので想像することしかできないが、よくわからない。この草書経の裏面には、「大般若経巻一百一十三の鎌倉時代風で書かれてゐる。奥書に『沙門空海』と書いている文字は草書体で読みにくいが一筆である。恐らく同一人の手になるものといふもよいであらう。昔から信仰上弘法大師と称するものである。」

という。この「奥書」が紙背ではなく、表の「智恵訪文」の奥書かと思われる。ところで、同書に載る5行の図版は、現在、『月台』（東京国立博物館蔵）に貼られている「智恵訪文」12行中の3行目から7行目の部分と完全に一致する。ということは、住友家の28行が分割されたということなのであろうか？　ならば、題名の付された部分はどこへいったのか？「沙門空海」という奥書部分はどこへ行ったのか？疑問だらけだが、さっぱり分からない。

ツレと思われる断簡は、吉川家蔵『翰墨帖』、古筆手鑑「かたばみ帖」[注3]、古筆手鑑「藻鏡」[注4]、宝島寺蔵古筆手鑑[注5]にある。料紙の縦の高さが、『古写経綜鑑』に八寸一分とあり、分かる範囲でいずれも25センチ前後である。一行の字詰めは19～22字の範囲である。それらに比べると、川崎男爵家旧蔵の断簡は22～24字で若干多めである。紙高も不明なので、ツレと認定するのにはいささか躊躇されるのだが、書風及字形が完全に一致するので、一応ツレと考えておきたい。

わからないだらけで、判読もままならないが、とにかく、むりやり解読してみる。（図4）

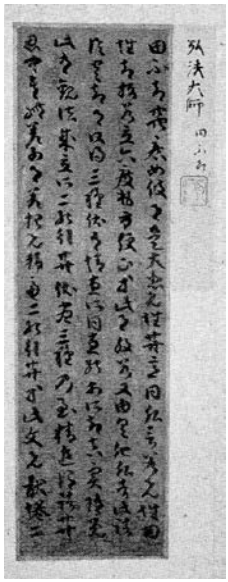


図4　空海・仏書切

田不知菩薩広如彼即是大悲無性菩薩意同仏言若無性四
性知摂若立六度第方便止等此即教若又由具他弘者此諸
論其知即故得三種伏有情恵所同恵能於所知真実隋覚
此有観法成立所二能行菩薩伏盡三種乃至精進得諸菩薩
忍中其体差別即差根無精通二能行菩薩等此文無厭塔二

間違いだらけだろうが、解読を進める一里塚になればよいとしよう。

六「慈覚大師章無有（守村印）」

『大般涅槃経』の注疏の断簡三行半である。経文本文は、『涅槃経』の「巻十六梵行品八之二」（但し、「巻十五梵行品之二」にも同文の箇所があるので、厳密にはどちらとも決め難い）。入筆、終筆の筆先が非常に鋭く整斉たる楷書体で、

ツレと思われる断簡は十数点ありそうである。本断簡の前後に比較的近い所で接続する部分の断簡として、貫前神社所蔵手鑑中のものと、須磨寺所蔵古筆貼交屏風[注6]中のものがあげられるだろう。鴻池家旧蔵手鑑（大東急記念文庫蔵）[注7]や「墨叢」（永青文庫蔵）、「文彩帖」（根津美術館蔵）などに貼られているものもツレらしい。慈覚大師の名を冠する古筆切としては最も数多く見られるもののようである。（図5）



図5　円仁・経疏切

草無有罪報者以無命故言有罪者以
悪心故殺一闡提無有罪報猶如刈
草斬死無有罪也何者以無信等故善
男子汝先所言如来何故罵提婆
達多癡人食唾汝亦不応作如是問

七「慈恵大師但為菩薩（守村印）」

『法華経』巻二「信解品第四」の偈の二行。ツレかと思われる断簡が国宝手鑑『見ぬ世の友』にあり、「山上切」とされている。慈恵大師良源は比叡山横川を開いたので、その名を冠する経の断簡を「横川切」とすることが多い。「山上」も比叡山山上の意味で名づけられたのだろう。紺紙に金泥で太い天地の界線を引き、金泥で文字を書いた堂々としたもので、高麗経だろうと言われている。この種の断簡はたいがい「慈恵大師」と極められている。経典の内容は、『見ぬ世の友』の「山上切」の場合は『法華経』の断簡である。また、『藻塩草』のものは「横川切」とされており、内容は『華厳経』（四十巻本）である。実際、「慈恵大師」と極めのある経切の断簡は多くの場合、『法華経』か『華厳経』である。ただし、すべて同筆というわけではなく、筆跡・寸法・界線の形式などで何種類にも分れる。川崎男爵家旧蔵の本断簡は、どうやら『見ぬ世の友』のもののツレであるように見える。したがって、「山上切」ということになろうか。（図6）



図6　良源・山上切

但為菩薩　演其実事　而不為我　説斯真要
如彼窮子　得近其父　雖知諸物　心不希取

八「藤原佐理卿おもふ事（守村印）」

これが、今回の問題の断簡の一つなので、まず本文を掲げてみる。（図7）



図7　藤原佐理・歌切

おもふ事はへりしに
　しかにまて、
世中をいとひかてらに

という三行である。とりあえず、余計なことを考えずに普通に考えてみると、『後撰集』の断簡かと思われる。『後撰集』巻十七・雑三（一二三三番）に、作者名の記載なく、

　思ふ事侍りけるころ、志賀にまうでて
世中をいとひがてらにこしかどもうき身ながらの山にぞ有りける

とあるからである。普通なら、直前の歌の作者名（よみ人しらず）を受けて、この歌も「よみ人しらず」ということになる。

しかるに、『在中将集』（業平集三九番に）、

　思ことありて、しかにまかりて
世中をいとひかてらにこしかとも　うき身は山のなかにさりける

とある。そうなると、本断簡は、『業平集』の断簡の可能性も出てくるが、これだけの情報では、いずれとも決め難い。

いったんここで筆を止めておき、後でもう一点の断簡を取

り上げる中で、再び問題の考察を続けよう。

九「世尊寺殿行成卿時□（了雪印）」

『大楽金剛不空真実三麽耶経』の断簡三行である。伝行成筆の経切はあまり多くない。内容的にもあまり共通性がなく、確認できるものも少数に止まる。そういう中で、本断簡は、内容を確認でき、ツレも一点確認できる。大正八年三月二十四日の『子爵諏訪家御蔵品・伯爵某家旧御蔵品・熱田加藤家御蔵品入札目録』にある古筆手鑑の中に貼付されている断簡である。この手鑑は何度も売りに出されて、所蔵者を転々としていたらしい。最後に出たのが昭和十六年六月の『濤聲館蔵品入札図録』である。さて、川崎家の断簡に戻るが、極札の本文引用部分の二字目は、そっくりに写そうとしたらしいが、読めなかったらしく、でたらめな文字風の形が書かれている。□としておくしかない。本文は、以下の通りである。（図8）



図8　藤原行成・経切

時薄伽梵能調持智拳如来復説一切調伏
智蔵般若理趣所謂一切有情平等故念怒
平等一切有情調伏故念怒調伏一切有情

十「慈鎮和尚おもひいる（守村印）」

『新古今集』巻十四の断簡。一三一七番から一三一九番の上句までの九行である。伝慈円筆の『新古今集』断簡は「円山切」を中心に非常にたくさんあるが、本断簡はその「円山切」と考えられる。慈円は真筆資料が残っているので、ある程度比較が可能であるが、「円山切」は真筆とは言えないようである。しかし残存数は多く、三十数葉を見ることができる。ここにまた一葉を加え得たことになる。（図9）

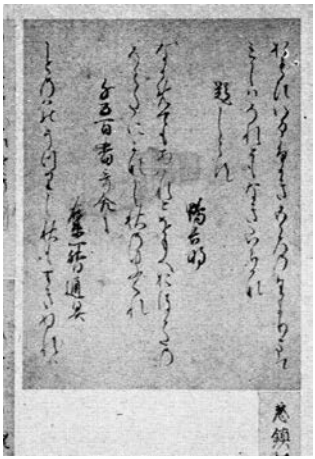


図9　慈円・円山切

おもひいるふかきこゝろのたよりまて
ミしはそれともなき山ちかな
　題しらす
　　鴨長明
なかめてもあハれとをもへおほかたの
そらたにかなし秋のゆふくれ
　千五百番哥合に
　　右衛門督通具
ことのハのうつりし秋もすきぬれハ

十一「西行法師はなをこそ（守村印）」

『林葉集』の断簡十二行である。俊恵の歌集『林葉和歌集』の古筆切は、伝西行筆のものしか知られていない。原本に近い時代の写本の断簡として貴重なものであるが、すでに久保木秀夫氏によって、詳細な研究がなされており、[注8]書陵部蔵の近世写本が、他ならぬ伝西行筆本の忠実な臨模本であることが明らかにされている。その上で、久保木氏は周到な校本も作成されているので、断簡捜索の重要性は大いに減少したといっていい。この断簡については、『古筆切資料集成三』にすでに翻刻もなされているが、図版の紹介はないので掲げておく。（図10）

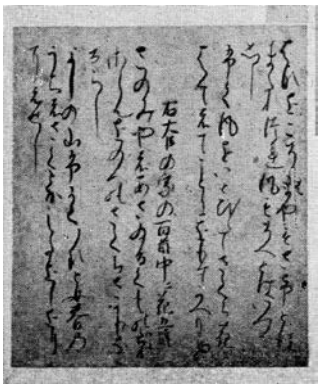


図10　西行・林葉集切

はなをこそまやもさけとは
またれつれ風もそへとはいつか

思し

ふく風をいとひ〳〵てさくら花
はてはてことにをりてかへりぬ

右大臣の家の百首中ニ花五首

さのみやはあさゐるくものくれ（ハれ）
さらんをのへのさくらさかりな
るらし

よしの山ふかくいれとも春の
うちはさくらかえたをしをり
にはせし

十二「小野道風提若有（守村印）」

『金剛般若論』の三行である。紺紙金字経であろう。小野道風を伝称筆者とする経切としては、「愛知切」の『観普賢経』が最も有名であろう。丁字吹きの料紙全面に金砂子を撒き、金泥で界線と罫線とを引いた豪華な装飾経である。数は少ないが『無量義経』もあるようだ。装飾経、紺紙金字経を問わず、伝道風の経切というとたいがい『法華経』（『普賢経』・『無量義経』も含めて）であるところが、何故か分からないがおもしろい。

ツレと確認できるものを探すと、久保木秀夫氏が紹介した、国文学研究資料館所蔵の古筆手鑑（99―136）（注9）所収の経切が該当しそうである。国文学資料館の公開画像を見ると、紺紙に銀泥の界罫を引き、一行ごとに金字と銀字を交替するいわゆる金銀交書経である。あらためて本断簡の写真を観察すると、一行おきに文字色が薄く見える。罫線も色が薄い。これは金銀交書のモノクロ写真の時によく見られる特徴である。確かに、両者はツレに違いないようだ。（図11）



図11　小野道風・経切

提若有菩薩以滿無量阿僧祇世界七宝等
此何所顯示以有如是大利益故決定應
演説如是演説而無所染経言云何演説而

十三「藤原佐理卿しらくもの（守村印）」

これが、今回問題にする二枚目の断簡である。これも、まずは本文の翻刻から掲げることにしよう。（図12）

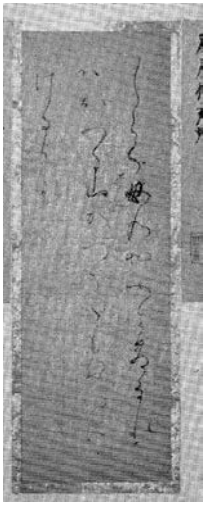


図12　藤原佐理・歌切

しらくものやへかさなれ
ハかへる山かへる〳〵もおいに
けるかな

という三行である。これも普通に考えると、『古今集』の九〇二番の歌一首である。前に作者名があったのかどうか、これだけでは分からない。『古今集』ならば、「寛平御時后宮歌合の歌　在原棟梁」という題詞と作者名があるはずである。それらがなければ、私家集で、「棟梁集」の可能性が出てくる、というわけである。そこからの問題は、節をあらためて後述することにしよう。

十四「行成卿かもめこそ（守村印）」

『後拾遺集』巻六の四二〇番の歌である。非常に見えづらいのだが、よくよく観察すると、亀甲繋ぎ紋様の唐紙に散らし書きで歌を書いている。伝行成筆の「後拾遺集切」というものは他にない。一〇二七年に没した行成が一〇八七年完成の『後拾遺集』を書写するはずもないから当然だが、古筆切の伝称筆者というものは往々にして、小野道風筆の『和漢朗詠集』（『徒然草』）のごとく、噴飯ものの鑑定がまかり通るのである。さて、そこで、もう少し探索範囲を広げて、行成と「後拾遺」が結びついた例を探すと、『予楽院臨書手鑑』に「行成」と札を貼った『後拾遺集』の抄出がある。「陽明叢書」の影印の解説では、「伝源俊頼筆後拾遺集」であるとしており、『古筆学大成』では、「伝源俊頼筆粽切・糟色紙本後拾遺集」の臨模本とする。村上翠亭・高城竹苞氏も、「粽切」の写しとする。[注10] そうだと認められるならば、本断簡も同じく伝源俊頼筆の「粽切」の写しの可能性があるということになるかもしれない。「粽切」はいずれも破り継ぎの美麗な料紙に書写されたものばかりであるが、予楽院は料紙までは

写していないので、何とも言えない。はたして「粽切」の写しと言えるのかどうか、疑問が残らないわけでもない。（図13）



図13　藤原行成・後拾遺集切

かもめこそよかれにけらし
　ゐなのなるこやのいけみ
　　つうはこほり
　　せり

十五「従二位家隆卿（おもひあれ）（守村印）」

『新古今集』巻十一・恋歌一の一〇三二番から一〇三三番の断簡。いわゆる「祐海切」である。頭部に撰者名注記を持ち、歌頭に長い掛け点をもつ様子は特徴的で見間違えることはない。以前にも指摘したが[注11]、『古筆学大成』は、この江戸時代以来「祐海切」とされてきた物ではなく、別の筆跡の物を「祐海切」と分類して混乱を生み出してしまったのは惜しむべきことであった。この「祐海切」もかなりたくさん現存しているようである。（図14）

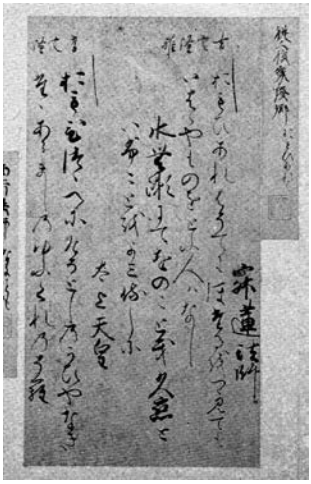


図14　藤原家隆・祐海切

寂蓮法師
おもひあれはそてにほたるをつゝみても
いはゝやものをとふ人ハなし
　太上天皇
おもひつゝへにけるとしのかひやなき
たゝあらましのゆふくれのそら

十六「西行法師（なにとも）（守村印）」

通常は藤原忠家筆柏木切あるいは二条俊忠筆二条切と称される二十巻本歌合の断簡である。やや鎌倉風の書風の箇所を西行筆と称することはままあること。この歌合は、『平安朝歌合大成』では九九番の「正暦年間夏花山法皇東院歌合」の13番歌である。本断簡も萩谷朴氏によって、すでに収集されており、付け加えるべきことは何もない。（図15）



図15　西行・廿巻本歌合切

右　　なかのふ（中将）

なにことも思はぬやとのかやり火を
くゆるとたれかいひはそめけむ

すでに萩谷氏が指摘している通り、「なかのぶ」は「なりのぶ」の誤りで、「か」と「り」の仮名の相似による誤謬である。

「中将」という注記が小さく書き込まれていることも、萩谷氏の解説文中に述べられている。

以上で、目録に掲載された古筆切の図版はすべてである。十六点のうちの十五点を見ることができた。すでに報告・紹介ずみのものもあるが、未紹介のものも数点あり、なかなか興味深い手鑑である。願わくばいずこかに現存していてもらいたいものである。

二　二つの歌切について

さて、後回しにしておいた、二枚の歌切について述べて行きたい。

実は、この二葉を合体したものが、『予楽院臨書手鑑』中に存在するのである。

次のように書かれている。

しらくものやへかさなれ（本マヽ）
ハかへる山かへる〳〵もおいに
けるかな
　おもふ事はへりしに
　　しかにまて、
世中をいとひかてらに（二字滅歟）

予楽院はこれに筆者名の札を付けていないので、誰の書かも不明であったが、「陽明叢書」の解説中で、春名好重氏は、「伝藤原行成筆下絵歌集切」の写しとした。他方、これとほぼ同じ内容の断簡が根津美術館所蔵手鑑『文彩帖』にあり、それには、

しらくものやへかさな
　　れる
返山かへる〳〵も
　おいにけるかな
おなしことはへりしにしか

にまかりて

とある。この『文彩帖』の書き方を見ると、作者名表記がないので、私家集の断簡であると判断することはあり得る。非常に早い段階で（昭和36年）、久曽神昇氏が「在原棟梁集」かと推定した[注12]。『古筆学大成』（平成3年）も、この『文彩帖』の断簡を「棟梁集切」として掲出している。久曽神氏の名前に触れていないので、久曽神説を知らなかったのかどうかは分からない。しかし、実は、『古筆学大成』よりずっと早い昭和49年に、久保木哲夫氏がこの『予楽院臨書手鑑』の断簡が同じ内容で、かつ、棟梁の歌の次の歌が『後撰集』の「よみ人しらず」の歌（前述したように、業平集の歌でもある）であることに気づき、「棟梁集」とは断定できないことを指摘していたのである[注13]。『古筆学大成』はこの重要な久保木説も無視してしまったことになるから、『棟梁集』という判断は適切ではなかったのである。その後、高城弘一氏が予楽院臨書手鑑の詳細な研究を行い（平成10年）、予楽院の臨模と『文彩帖』の断簡から、これを「未詳私撰集」とした[注14]。上記の研究史には触れておられないので、おそらく研究史とは無関係に結論に達したのであろう。

翻って、川崎家旧蔵の切を見れば、これが予楽院の臨模した親本であることは明らかである。予楽院の臨模には小さい文字の注記が二カ所あるが、「さ（散）」の字の一部がつぶれている横に「本マヽ」とし、末尾二字分の空白に「二字滅歟」と書き込んでいるのは、予楽院が注記したものと考えられる。予楽院は寛文七年（一六六七）生まれ、元文元年（一七三六）没であるから、当然臨模はその間に行われている。一方、川崎家旧蔵手鑑の極札はその筆跡から見て、一枚の例外を除いてすべて（見えている十六点に限ってだが）古筆分家三代の了仲のものと見える。了仲は明暦二年（一六五六）生まれで、元文元年（一七三六）没であるから、二人は同じ年に亡くなっている。ほぼ同時代を生きていたので、二人の関係はみごとに重なっているのである。となると、二葉の断簡と、予楽院の臨模の前後関係はどうなるか？　予楽院が写した後に、二枚に分割され、それぞれに了仲が「藤原佐理卿」の極札を作成したのか、逆に二葉の断簡を伝称筆者が同じなので、予楽院が一枚にまとめて模写したのか、両方の場合が考えられる。ヒントはやはり『文彩帖』の断簡である。この場合、『文彩帖』の断簡が予楽院臨模の親本でないことが大事だ。本文に異同があること、文字の配置に違いがあることなどから、直接の親子関係にないことは明らかだろう。直接関係がないとすると、『文彩帖』の断簡の親本の段階かあるいはさらにそれ以前の写本の段階で、『文彩帖』所収断簡の祖本と、伝佐理筆の断簡の祖本とが同一の写本であった段階が考えられるからである。ならば、予楽院の臨模本は分割前の姿を伝えていると言うべきで、臨模の後に了仲の元で二枚に分割され、それぞれに了仲が藤原佐理の極札を書いて付けたことになるのであろう。二枚に分けたが、結局両方とも了仲の手元に残り、両方とも一冊の手鑑に貼られた、ということになろうか。ほとんどの断簡に了仲の手になる極札が貼られているという事実が、この手鑑が了仲に近い所で作成されたことを示唆していると思われる。別々のページに佐理、行成が貼られていたり、同じように、西行が別々のページに貼られているという貼り方は、あまり整理された貼り方ではなく、しかも右面に道風、佐理、行成とあって、左面に家隆、西行とあるのも変である。あまり検討もせず、適宜ざっと見当をつけて貼ったような感じなのである。そういうことが出来るのは、了仲の子孫が、手元に残っていたものを取敢えず貼ったというようなことが考えられるのではないだろうか。想像に過ぎないので、深入りするのはやめておこう。

当該二葉に戻るが、では、これは『棟梁集』なのか、『業平集』なのか、はたまた、両者の歌を並べた未詳の私撰集なのか？　棟梁が歌を詠んだことは、歌合に出詠していることからも分かるが、『棟梁集』というものは、『文彩帖』の断簡以外に存在していない。これを『棟梁集』とするのが適切でないなら、結局、『棟梁集』は存在しないということにならざるを得ない。もちろん長い歴史の中で失われた可能性まで否定することはできない。他方『業平集』の方であるが、『後撰集』の「よみ人知らず」歌を業平の歌としているのは第一類本の『在中将集』のみであり、「業平集」は他撰歌集である上に、第一類本には『伊勢物語』からの影響が指摘されるなど後代的な要素があるとすると、この歌の存在をもって、『業平集』とするのも早計であろう。すると「未詳私撰集」の可能性しか残らないようだが、いかがなものであろうか。前述のように、了仲は当該断簡に「佐理」の極めを付けた。『文彩帖』の断簡には、古筆家二代の古筆了栄（一六〇七年～一六七八年）の手になる「四条大納言公任卿」という極札が付いているという。どちらも平安時代に遡れそうな古い写本の断簡であるらしい。散逸した非常に重要な歌集の存在を覗わせる。

結局、よく分からないという結論を変えることはできないのだが、予楽院の臨模した原本が実在する（した）ということは確認できた。たった一葉とはいえ、これが江戸時代初期にはすでに古筆切としてあったという事実は、ツレの存在の可能性を幾分かは期待させてくれるのではないだろうか。

（注1）村上翠亭・高城弘一監修『古筆鑑定必携　古筆切と極札』（平成16年3月、淡交社）
（注2）田中塊堂著『古写経綜鑑』三〇五～三〇六頁（昭和17年9月、鵙故郷舎）
（注3）石澤一志・久保木秀夫・佐々木孝浩・中村健太郎編『日本の書と紙　古筆手鑑「かたばみ帖」の世界』（平成24年6月、三弥井書店）
（注4）昭和8年11月18日開札の『某家所蔵品入札目録』の47に古筆手鑑「藻鏡」として写真が掲載されている。
（注5）未公刊。撮影させていただいた写真による。
（注6）田中登著『須磨寺塔頭正覚院所蔵古筆貼交屏風』（昭和63年8月、ジュンク堂書店）
（注7）井上宗雄・岡崎久司編『大東急記念文庫善本叢刊　中古中世篇別巻三　手鑑　鴻池家旧蔵』（平成16年8月、汲古書院）
（注8）久保木秀夫著『林葉和歌集　研究と校本』（平成19年2月、笠間書院）
（注9）久保木秀夫「国文学研究資料館蔵古筆手鑑2点の紹介その2」（『国文研ニューズ』No20、平成22年8月）
（注10）村上翠亭・高城竹苞共著『近衛家熙写手鑑の研究［仮名古筆篇］』（平成10年2月、思文閣出版）
（注11）拙考「古筆切拾塵抄・続（二）」（『成城国文学』第25号、平成21年3月）

（注12）久曽神昇『古今和歌集成立論 研究編』（昭和36年10月、風間書房）

（注13）久保木哲夫「『予楽院模写手鑑』と家集切」（『リポート笠間』10、昭和49年10月）。同氏『平安時代私家集の研究』（昭和60年12月、笠間書院）に収録。久保木氏は、この事を『和歌文学大辞典』等でも解説している。

（注14）注10に同じ。

（こじま・たかゆき　成城大学名誉教授）